

英語は無生物主語を本当に好むのか

西光 義弘

0. 序論

この論考ではまず英語と日本語の主語に関して相反する傾向が別々の人々によって指摘されていることを確認し、その矛盾を解決する方向を見つけることとする。その過程において、表面的に人間主語と無生物主語といった形で日本語と英語において目立って対比をなすことから、主語に目を引かれてしまったことがそもそもの間違った方向づけの原因であることを明らかにする。

1. 相反する傾向

1. 1. 英語：無生物主語 対 日本語：人間主語

相反する傾向のうちおなじみのものからまず見ておこう。(1)に見るように明治時代に Chamberlain によってすでに気づかれていた傾向で、英語が無生物主語をとるときに日本語では人間主語をとるというものである。このことは英作文の教科書や参考書にもかならず挙げてある事項である。

(1) The heat makes me feel languid.

(Chamberlain)

熱気が私をだるく感じさせる。→ 暑いので私は身体がだるい。

以下同様な例を挙げておく。無生物主語を維持した直訳調を左に挙げ、日本語らしい人間主語の訳を右に挙げておく。左の直訳調のものの中にはそれほど不自然でないものから、絶対に無理なものまでさまざまである。(2)と(6)は左の直訳調も言える。ただし少々構えた文体であると感じられる。特に心理動詞では文法性が高くなるようである。(5)は人によっては受け入れる人がいるかもしれない。その他の*のついた文はとてつと文法的とは言えない。

(2) Despair drove him to commit suicide.

絶望が彼を自殺へ追いやった。→ 希望を失って彼は命を絶った。

(3) What brought you here?

*何があなたをここに連れてきたのか。→ あなたは何故ここにきたのですか。(小島)

(4) This bus will take you to the station.

*このバスはあなたを駅に連れて行きます。→ このバスに乗れば駅に行きます。

(5) This medicine will cure your cold quickly.

この薬は風邪を直ちに治します。→ この薬を飲めば風邪はすぐに治ります。

(6) His words surprised me.

彼の言葉は私を驚かせた。→ 彼の言葉にびっくりした。

(7) I'm sorry. The curve threw me.

ごめんなさい。*カーブが私を投げたものからです。→ ごめんなさい。カーブで体が揺れたものですから。

日本文学の英訳においてもこの日英語間の対照的な傾向を見ることが出来る。夏目漱石の「坊ちゃん」の冒頭の文を例に見てみよう。原文では主語は省略されているが、明らかに「損ばかりしている」のは坊ちゃんであり、人間主語をとっている。それに対し、イギリス人の Alan Turney の英訳では無生物主語をとって my inherent recklessness が主語になっている。注目すべきはアメリカ人の Burton Watson が I have suffered と人間主語にしていることである。もちろんこれも自然な文である。ただし Burton Watson という人は他の翻訳などを見ても直訳調に訳しているのだから、ここでも原文に近く訳していると見てよい。そして日本人の訳者は2人も人間主語で訳しているのを見ると、かなり英語のできる人でもつい人間主語にしがちであることが見て取れる。

(8) 親譲りの無鉄砲で子供のときから損ばかりして

いる。(夏目漱石『坊ちゃん』)

- a. Ever since I was a child, my inherent recklessness has brought me nothing but trouble. (Alan Turney)
- b. From childhood I have suffered because of the reckless nature I inherited from my parents. (Burton Watson)
- c. Because of an hereditary recklessness, I have been playing always a losing game since my childhood. (毛利八十太郎)
- d. A great loser have I been ever since a child, having a rash, daring spirit, a spirit I inherited from my ancestors. (佐々木梅治)

この日英語の対照的な傾向を安西徹雄氏は(9)のようにまとめあげている。

(9) (英語)「XであるAがBをYにする。」

(日本語)「AがXであればBがYになる。」

以後この傾向を英語の傾向だけをラベルとして「無生物主語の傾向」と呼ぶこととする。

1. 2. 英語：人間中心 対 日本語：状況中心

第2の傾向は筆者の確かめた範囲では Alfonso (1971)が最初に指摘したと見られるもので、一般的に英語が人間中心(person focus)であり、日本語が状況中心(situation focus)であるという傾向である。人間中心とは人間主語をとり、状況中心とは無生物主語をとるのであるから、1. 1で見た傾向が逆転している。

実例を見るにあたって、国広(1974a, 1974b, 1974c)が Alfonso とは独立して観察した例を取り上げる。国広はジュネーブ学派の言語学者 Henri Frei がフランス語について基本的な2千の文を挙げたもの [Henri Frei(1953)] に対して、英語のもの [T. J. A. Bennett(1972)] と日本語のもの、アンリ・フレ(1971)の3つを突き合わせた結果、表現面について目立つ違いとして英語およびフランス語が人間中心であるのに対し、日本語が状況中心であるということを指摘した論文を1974年に3本書いている。(10)から(13)の例は国広がフランス語、英語と日本語を突き合わせたものである。フランス語と英語は基本的に同じで、人間主語をとるが、日本語は無生物主語をとっている。

- (10) On aura du bœuf. (187)
We'll have some beef.
今日は牛肉が出ますよ。
- (11) Lui et moi, après discussion: Nous sommes arrivés à une décision. (769)
We've come to a conclusion.
やっと結論が出た。
- (12) J'ai perdu un bouton. (291)
I've lost a button.
ボタンがとれちゃった。
- (13) Poliment: Vous avez reçu ma carte? (466)
Did you receive my card?
ほくのはがき、着きましたか。

国広の観察に続いて、Monane and Rogers が外国語としての日本語学習者が初級を終えて、中級・上級の段階に注意すべき問題を扱った論文で日本語らしい表現の中にこの人間中心と状況中心の問題を取り上げた。その論文が収録されているハワイの日本語教師の研究集会の会議録を編集した Hinds はこの問題に関心をもち続け、後に Hinds(1986)としてまとめた。その中には Hinds が身の回りで起こった発話で該当する例が挙げられている。(14)の日本語の部分の矢印の左の文は妻であった日本人女性が赤ん坊にミルクをやっている、思わず言ったことばである。それを聞いて英語だと“Oh no, the milk spilled.”とは言わないことに気がついたのである。

(14) “Oh no, she spilled the milk.”

#「あら、この子ミルクをこぼした。」→「あら、ミルクがこぼれた。」

(15)は名古屋の喫茶店で、コーヒーをこぼしたり、コーヒー茶碗を落として割ってしまったときにウェイトレスが思わず言ったものである。

(15) 喫茶店のウェイトレス

「あ、こぼれちゃった！」 “Oh, I spilled it.”

「あ、割れちゃったわ。」 “Oh, no, I broke it.”

日本文学の英訳においても日本人と英語母語話者の訳者によって差異が出ている例がある。(16a)の近藤の英訳を見ると、the outline が主語となって状況中心になっているのに対して、(16b)の McClellan の英訳では I が主語となって人間中心である。近藤の訳は他の面でも原文に近い。原文では「私」に連体修飾がかかって背景的な状況を説明しているとい

う日本語特有の構文をとって、その部分を近藤はそのまま英訳でもIを先行詞とした連続用法の関係詞節で訳している。英語でこの文は非文法的とまでは言えなくてもかなり不自然である。このことを見ても近藤訳がかなり原文寄りのものであることがわかる。

(16) 骨組みだけはほほできあがっているくらいに考えていた私は…(夏目漱石『こころ』)

- a. ... I, who, picturing in the air a gigantic thesis, had imagined that the outline had almost been made up in my mind ... (近藤いね子)
- b. ... I was building up a solid and almost complete framework for my thesis ... (Edwin McClellan)

以後この日英語の対照的な傾向を英語の傾向だけをとってラベルとして「人間中心の傾向」と呼ぶことにしよう。「無生物主語の傾向」と「人間中心の傾向」を荒っぽくまとめてしまえば、日本語でも英語でも無生物主語も人間主語が可能で、なんら違いがないことになってしまう。そこで明らかにしなければならぬのはそれぞれどのような場合に逆の傾向のどちらが現れるのかということになる。Alfonsoは「とっさ」のときに日本語で状況中心になる傾向があるという指摘をしている。魚釣りをしている人が釣り上げた瞬間という「とっさ」のときに見ていた人はアメリカ人であれば、(17a)を言い、日本人であれば、(17b)を言うという例を挙げ、このようなとっさのときに人間中心と状況中心の差がはっきり現れるという。確かに上の例でも(14)、(15)などは「とっさ」のときの発言である。

- (17) a. He's got one! / He's caught one!
b. あ、釣れた。 / あ、かかった。

しかし日本語における状況中心の文は「とっさ」のとき以外の落ち着いている場合にも用いられる。上に挙げた例でも(10)~(14)の中には「とっさ」のときにも用いられうるものもあるが、基本的に落ち着いている場合に用いられているといえる。

Alfonso自身がつじつま合わせのように指摘している対照的な文を見ればよくわかる。すでに釣ってあるバケツに入ったたくさんの魚を見た場合(18)のような文を言うというのである。

- (18) a. He's doing pretty well.

b. よくとりますね。 / よく釣りますね。

(18b)を(19)と比べてみよう。

(19) よくとれますね。 / よく釣れますね。

(19)のほうが自然であると思われる。(18b)であると「そんなに釣るなよ」といったニュアンスが少々出ている。したがって確かに「とっさ」の場合に差異が現れるが、実はこの差異の範囲はもっと広いということがわかる。そうすると逆に(18b)は日本語の状況中心の例外であるということになる。すなわち条件が満たされれば、状況中心も破られうるのである。そこで次に状況中心を破る事例を見ることによって、その条件を探ることとしよう。

1. 3. 英語：人間中心 対 日本語：状況中心 に対する反例

夏目漱石の『坊ちゃん』の中に人間中心となった例がある。(20)の例を「しきりに花火が揚がる」と比べてみると、(20)では「花火を揚げてやがる」というニュアンスがある。「しきりに」の意味も異なってくる。(20)ではわざとたくさん揚げている意味になるが、「しきりに花火が揚がる」では純粹に花火の頻度を言っているだけである。

(20) 舞台とは反対の方面で、しきりに花火を揚げる。花火の中から風船が出た。帝国万歳と書いてある。天守の松の上をふわふわ飛んで営所の中へ落ちた。(夏目漱石『坊ちゃん』)

- a. On the side of the grounds away from the stage, fireworks were being set off and rockets were rising thick and fast into the air. One of the rockets released a balloon on which was written "Long Live the Empire." It drifted over the pine trees around the castle keep and came to earth in the barracks. (Alan Turney)
- b. In the opposite direction, fireworks were being set off. The rocket bursting out in midair let out a balloon with the characters, "Long Live the Empire" which, floating lightly over the tapering pine tree by the watch tower of the castle, fell at last behind the barracks. (佐々木梅治)

c. In the opposite direction, aerial bombs and fireworks were steadily going on. A balloon shot out on which was written "Long Live the Empire!" It floated leisurely over the pine trees near the castle tower, and fell down inside the compound of the barracks. (毛利八十太郎)

興味深いのは英訳では日本人訳者もイギリス人訳者も状況中心になっている点である。この場面描写では客観的な描写に徹するべきであるというのが、英訳における首尾一貫した態度であると見ることができ。ともかく日本語では動作主の意図性を表す場合に人間中心になるということがいえる。

人間中心の傾向が逆転する重要な事例として謝罪をする場面におけるたくさんの例がある。(21)と(22)はHindsがハワイ大学で日本語と英語の会話行動をビデオに収録した際の同じ状況における会話である。頭を通して首からかける方式のマイクをした場合に線が切れたときにどのように言うかの違いである。(21)に見るように日本人は人間中心の他動詞を用い、自分が悪いということをおさきり認めている。

(21) S: もうちょっと短いほうがいい? (Hinds)

A: うん。でも大丈夫みたい。

K: ちょっと壊したから直したの。

A: あっ。ほんと。

ところが(22)に見るようにアメリカ人は状況中心の自動詞を用い、自分のせいではないということをおうとする。

(22) M: I couldn't believe it. I thought you set me up. Just as I was putting the mike over my head, the string broke. (信じられないなあ。ちゃんとセットしてもらったと思っていたのに、マイクを頭に通していたら、線が切れちゃった。)

同様な例は水谷修・信子夫妻の著書に繰り返し挙げられている。先生にテープレコーダーを借りたところ壊れて、返すときに日本人であれば、(23)のように人間中心の他動詞を用いて自分が悪いということをお初めから認めるが、アメリカ人の留学生はそのような場合の英語で普通言われる(24a)に基づいた(24b)を言いがちである。(24b)は状況中心の自動詞表現で、日本語では非常に無責任に聞こえる。そこで日本人

の先生はこんな無責任な留学生の面倒はもう知らないと怒ってしまい、留学生のほうは何故怒られたのかわからないという状況が何度となく繰り返されているとのことである。

(23) 「すいませんが、これを壊してしまいました。」

(24) a. I don't know how it happened, but the tape recorder broke.

b. 「どうしてかわかりませんが、テープレコーダーが壊れました。」

日本語では自分が悪くなくても自分が悪いとって、相手に許してもらおうというシナリオが伝統的に確立していて、(23)の場合だと、相手が「いいよ、いいよ、もともと調子が悪くなっていたし、寿命が来ていたんだらう。」と言ってもらおうという予測の下に発言している。それに対して(24a)では初めに自分が悪いと言ったら、弁償を求められてしまうという前提の下に認めないところから出発しているのである。

2. 矛盾の解決に向けて

無生物主語の傾向と人間中心の傾向という一般化を維持するかぎり、矛盾が残ってしまう。そこでこの問題は主語の選択がそもそもの問題なのではなくて、動詞の選択のほうが重要なのではないかということに突き当たる。動詞を見てみると今まで挙げられた例文では無生物主語の傾向においても人間中心の傾向においても英語では他動詞が用いられ、日本語では自動詞が用いられていることがわかる。例外は(11)と(20)から(24)までの例である。(20)から(24)までは例外である理由をすでに考察したので、問題は(11)である。英語の We've come to a conclusion. では人間主語で指示されている人たちによって到達したという意味が強く、実際 come to を reach という他動詞で置き換えることも可能である。英語で他動詞が多用され、日本語で自動詞が多用されることは寺村(1975)および池上(1981)などで指摘され、定説となっている。したがって無生物主語の傾向と人間中心の傾向という相反する傾向は実は動詞を見れば、英語では他動詞、日本語では自動詞を用いる傾向として統一的に考えることができる。では何故主語の違いが注目されたかといえば、表面的に目立つということが挙げられる。このことを立証するためには英語では「無生物主語(NP1) + 他動詞 + 無生物目的語(NP2)」が多用され、日本語では「無生物主語

(NP2) + 自動詞」が多用されるということを示し、更に英語では「人間主語(NP1) + 他動詞 + 人間目的語(NP2)」が多用されるのに対し、日本語では「人間主語(NP2) + 自動詞」が多用されることを示す必要がある。そうすれば人間主語対無生物主語の選択の傾向は日英語の基本的な違いではなく、動詞の選択に依存して起こるということがはっきりする。

2. 1. Agent も Patient も無生物の場合

そこで動作主も被動作主も無生物である場合を検討してみよう。その中には2種あり、日本語では人間の立場から訳したほうが自然なものとして英語の無生物目的語が日本語では無生物主語になるものがある。

2. 1. 1. 人間の立場から訳せる場合

人間の立場から訳したほうが自然な場合は英語における無生物目的語が具体的なものではなくて、抽象的な事柄を示す場合である。その場合も文法的には人間が表現されるとすれば、「NPにとって」という形をとり、事柄は「が」をとる。したがって基本的に日本語は「なる」表現であるといえよう。

(25) Our moderate fee ensures a pleasant trip. (毛利)

料金が格安になっておりますから、お楽な旅行ができます。

(26) Sparse hair makes the wish to be like other people impossible. (安西)

薄い髪は、他人と同じでありたいという願望を不可能にする。→ 髪が薄いと、他人と同じでありたいという願望も不可能になる。

(27) A humming of insects suggested the autumn.

虫の音が、秋であったことを思わせた。→ 虫が鳴いていたので、秋であったように思えた。

2. 1. 2. 人間の立場で訳せない場合

英語の無生物目的語が具体的なものを表すときには人間の姿は影も形も見えず、日本語ではその名詞句が表すものが無生物主語になったほうが自然である。

(28) The clouds hid the moon.

雲は月を隠した。→ 月が雲に隠された。雲で、月が隠れた。

(29) The key opened the door.

*その鍵がドアを開けた。→ その鍵でドアが開いた。

(30) The wall was blown by the storm.

嵐で塀が倒れた。(中島)

以上見たように英語では「無生物主語(NP1) + 他動詞 + 無生物目的語(NP2)」が多用され、日本語では「無生物主語(NP2) + 自動詞」が多用されるということがはっきりと立証された。

2. 2. Agent が人間で Patient も人間の場合

ところが英語では「人間主語(NP1) + 他動詞 + 人間目的語(NP2)」が多用されるのに対し、日本語では「人間主語(NP2) + 自動詞」が多用されることを示すことは難しい。せいぜい考えつくのは(31)の例である。

(31) a. The policeman caught the thief. (意図的)

b. 警官が泥棒を捕まえた。

c. 泥棒が警官に捕まった。

(31b)は警官の手柄に注目し、(31c)は結果に注目しているというニュアンスの違いがあるように感じられる。その他の例では自動詞がないので、できるのは受身形を作ることのみである。

(32) a. John deceived Bill.

b. 太郎が次郎をだました。

c. 次郎が太郎にだまされた。

これはなぜかということを見ると人間が人間に何かをする場合は意図的な動作主であるか、そのようなことが起こらないように気をつける責任があるという意味で他動詞構文をとるということしかできないのではないかと考えられる。したがって英語ではすべての主語と目的語の組み合わせについて他動詞が多用されるとはいえるが、日本語ではすべての主語と目的語について自動詞が多用されるとはいえないということになる。むしろ正確には英語では他動詞の使用範囲が広く、人間を主語とした意図的あるいは責任ある動作主という他動詞のプロトタイプから拡張され、無生物のような原因をも許すようになっており、それに比例して自動詞は自立的にプロセスを経るということを表し、外からの意図的な動作主が存在する場合には用いられないというふうにとめられる。逆に日本語では他動詞はプロトタイプの狭い範囲に止まっており、意図的あるいは責任あ

る動作主の場合に用いられる。自動詞はそれに対応して、拡張されて外に意図的な動作主が存在しても結果を重視すれば用いることができるのである。その具体的な例として(32c)がある。

〈参考文献〉

- Alfonso, Anthony (1971) *Japanese Language Patterns: A Structural Approach*. Vol. 2. Sophia University L. L. Center of Applied Linguistics.
- 安藤貞雄 (1986) 『英語の論理・日本語の論理』大修館
- 安西徹雄 (1982) 『翻訳英文法』日本翻訳家養成センター
- 安西徹雄 (1983) 『英語の発想』講談社現代新書
- Bennett, T. J. A. (1972) *Two Thousand Sentence of British English*.
- Frei, Henri (1953) *Le livre de deux mille phrases, Librairie Droz, Geneve*.
- アンリ・フレ (1971) 『日本語二千字』早稲田大学語学教育研究所
- 林栄一 (1975) 「日英語両語表現の相違の奥にあるもの」『英語教育』1975年8月号
- 林栄一 (1976) 「日本語の語彙・英語の語彙」『英語教育』1976年12月号
- Hinds, John (1977) *Proceedings of the UH-HATJ Conference on Japanese Languages and Linguistics*. University of Hawaii: Honolulu.
- Hinds, John (1986) *Situation vs. Person Focus* くろしお出版
- Hoffer, Bates ed. (1974) *Proceedings of a U.S.-Japan Sociolinguistics Meeting*. Trinity University.
- 池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学』大修館
- 国広哲弥 (1965) 「日英対照表現構造論—英語無生物主語表現」『島根大学論集(人文科学)』第14号(国広(1967)に再録)
- 国広哲弥 (1967) 『構造的意味論—日英両語対照研究—』三省堂
- 国広哲弥 (1974a) 「人間中心と状況中心—日英語表現構造の比較—」『英語青年』1974年2月号 688-690頁
- 国広哲弥 (1974b) 「日英語表現体系の比較」『言語生活』1974年3月号, 46-52頁
- Kunihiro, Tetsuya (1974c) "Culture and system of expression in patterns—a contrast of English and Japanese," in Bates Hoffer ed. (1974), 13-24.
- 水谷修 (1979) 『日本語の生態』創拓社
- Monane, Tazuko and Lawrence Rogers (1977) "Cognitive features of Japanese language and culture and their implications for language teaching," in Hinds ed. (1977), 129-137.
- 毛利可信 (1975) 「英語の主語と日本語の主語」『月刊言語』1975年3月号
- 中島文雄 (1987) 『日本語の構造—英語との対比—』岩波新書
- 寺村秀夫 (1975) 「「表現の比較」ということ」国立国語研究所国語シリーズ別冊3『日本語と日本語教育—発音・表現編—』147-174頁
- 寺村秀夫 (1976) 「「なる」表現と「する」表現—日英「態」表現の比較」国立国語研究所国語シリーズ別冊4『日本語と日本語教育—文字・表現編—』49-68頁
- 寺村秀夫 (1978) 「構文的な日英語の違い」『英語教育』1978年11月号

(神戸大学文学部教授)